



K A P P A N O V E L S

長編ハード・アクション小説 書下ろし

殺戮者

さつ

りく
きよし

しゃ

井上 淳

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。また、今後、どんな本をお読みになりたいでしょうか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編ハード・アクション小説 ^{さつ りく しや} 殺 戮 者

昭和 60 年 12 月 20 日 初版 1 刷発行

定価 690 円

著 者 ^{いの} 井 ^{うえ} 上 ^{きよし} 淳

発 行 者 大 坪 昌 夫

印 刷 者 萩 原 歳 子

東京都文京区後楽2-21-12
萩 原 印 刷

発 行 所 東京都文京区音羽2 株式会社 光 文 社
振替 東京6-115347 電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(複本製本)
表紙の模倣・意匠登録 116613 © Kiyosi Inoue 1985

ISBN4-334-02630-3
Printed in Japan

長編ハード・アクション小説・書下ろし

さつ りく しゃ
殺戮者

いの うえ きよし
井上 淳



カッパ・ノベルス

『さつりくしや
殺戮者』 目次

O v e r t u r e 5

第一章 ゲームの概念 21

第二章 ゲームの進行 69

第三章 ゲームの帰結 167

E p i l o g u e 220

解説／国際色豊かな大型サスペンスの旗手

権田萬治 ごんだまんじ 225

本文イラストレーション／辰巳四郎

O v e r t u r e

かすかに湿り気をおびた風が、樹木の枝を震わせて黯い原生林のなかを吹きぬけていく。こすれあつた葉がざわめき、梟の啼き声がせつなげな笛の音のように、遠くで響いている。

兵士は苔にまみれた岩に疲れきつたからだをあずけ、編上式のブーツにからみついた蔓草をささくれだった指さきでひき剝がした。

風に運ばれた雲が月を覆い、墨色の闇がすべてを包みこんだ。

雨になるかもしれない――。

重苦しく澱んだような空を仰いで、兵士はそうつぶやいた。

夜明けには、まだかなり間があるはずだった。

どれくらい森のなかをさまよい歩いたのだろう。

基地を発ったのは、昨日の夕刻だった。いや、一昨日だったのかもしれない。それとも、三日前だったか……。

時間の感覚が、あやふやになっていた。

ただ樹海の前でもういちどうしろをふりかえったとき、地平線に沈みかけた夕陽が、不気味なほどに赤くざらついていたことだけは、はっきりと憶えている。

いつまでこうやって迷路のような樹海をうろつきまわらなければならぬのだろう。もう、何週間も歩きつづけているような気がした。もしかしたら、道に迷ってしまったのかもしれない。そんな想いが、

ふと彼の意識をよぎった。そうだとしたら、永遠にこの原生林に閉じこめられてしまうのだろうか。

じめついた森のなかを、涯しなく彷徨したあげくに、腐った葉っぱに埋もれて惨めに朽ち果てていくのだ。誰にも看とってもらえず、ひとりぼっちで……。

ありうるはずのないことだと、頭脳^{あたま}ではわかっていた。しかし、胸の片隅にぼつんと芽生えたそんな不安が、たちまちのうちにとめどなく膨れあがっていくのを、彼はどうすることもできなかった。

兵士は不精髭にまみれた頬を、両掌で挟みつけて深い溜息を吐いた。

月が隠れてしまうと、それこそ完全に方角を把握することができなくなる。それが彼の不安に拍車をかけた。

兵士は叫びだしたくなる衝動を、かろうじて堪えた。

彼は自分が何者かに監視されていることに気づいていた。この樹海に足を踏み入れた瞬間から、彼は誰かの眼ざし^{まな}を背中に感じていた。その視線は、常に彼のうしろからつきまとってきた。

原生林にはいつてはじめのうちは、幾度もいきなりからだを翻^{ひるがえ}して、まわりを搜索した。だが、人間の姿はおろか、猿一匹見つけだすことはできなかった。

けれども、彼の防衛本能はそれを敏感に嗅ぎとっていた。怯えがもたらす幻覚では、けっしてない。間違いなく、誰かがどこかから、彼の行動をじっと見張っているのだ。

だから彼は、基地を離れて以来、一睡もしていなかったし、なにも食べていなかった。それが疲労をいっそう増幅させていたが、ちよっとでも隙をみせれば、そいつが襲いかかってきそうだった。

彼は小便を垂れるのにさえ、すぐさま反撃に移れた。

るように、見はらしのきく場所を選んで、女みたい
にしゃがみこんだ。

そのときだった。

がさり、と降り積もった病葉わづらばを踏みしだく靴音が、
近くで聞こえた。

咄嗟に兵士は岩蔭に身をひそめ、腰のベルトから
ナイフをぬきとった。刃渡りがゆうに二〇センチを
越す、大型のハンティング・ナイフだった。プレー
ドの背は、獲物の骨を断ち切るためにぎざぎざの鋸のこぎり
様になっている。

それが、携帯を許された唯一の武器だった。

彼は汗ばんだ掌をパンツで拭いとると、細い鞣しなめ
革を巻ぎつけたグリップを握りしめ、クロス・ガー
ドに親指をかけた。

靴音は、それきり聞こえなくなった。

あたりには、また静寂が甦った。

しじまをひき裂いて、ひゆるひゆると風が鳴いた。

それに呼応するように、木の葉が騒ぐ。

兵士の喉仏が、いそがしく上下する。

そして彼は、沈黙に耐えきれなくなった。

「でてこい」兵士は岩蔭から顔をのぞかせて、罅割ひび
れた声でわめきたてた。「そこにいるのは、わかっ
ているんだ。きさまがずっと俺の後をついてきてい
たことも、知っているぞ」

答えはなかった。

風が彼の叫びをちぎりとっていった。

「でてこい」

兵士は闇にむかってくりかえした。

「でてこなければ、こっちからいくぞ」

兵士は、ゆっくりとたちあがった。

膝がこきざみに震えていた。彼は片手を岩につい
て、からだをささえた。

突然、頸筋になにかが蛇のように絡みついた。

人間の腕だった。

彼はナイフをもった手をもちあげようとした。だが、できなかった。背後から伸びた手が、彼の手頸をねじるように抑えつけた。あっけなく掌の力がぬけ、ナイフがこぼれおちた。

「音のしたところに、いつまでも敵がいるとはかぎらない」

なま暖かい囁きが、彼の耳朵を擦った。

兵士は懸命に身をよじった。

「無駄だ」

男の声が冷たくいった。

男の腕が兵士の頸を、わずかに強く扼めつけた。

それだけで頸椎がぎしぎしと軋んだ。兵士は抵抗を諦めた。

「失格だな」

男がいった。

品物を値踏みするような口調だった。

もうひとりの兵士は、はじめの男よりほんのすこしましだった。

彼は、時間の観念を喪失してしまふようなことはなかった。それが基地をあとにしてから迎える三度目の夜であることや、明日になれば基地に帰還できることを彼はちゃんと知っていた。

こうした環境で生きのびる技術に長けた兵士だった。

彼は木の枝を見て、方角を測る方法を身につけていたし、食べられる植物とそうでないものを識別することもできた。

彼は器用にナイフを操り、獣を捉えるための罠をこしらえた。二日目の朝、その罠に野生の猪がかかっていた。火をおこすことは禁じられていたので、彼は獲物の生肉を貪り啖った。

しかも彼は、充分に睡眠をとることができた。

彼は蔓草を結びあわせて長いロープをつくり、そ

れを四囲に張りめぐらせて、自分のねぐらを確保した。なにかが彼の寝室に近づいてロープを切断すると、その先端に繋ぎとめてある石ころと小枝を組みあげたちいさなやぐらが音をたてて崩れ、たちどころに危険が迫ったことを報せる仕掛けだった。

もちろん彼は、最初の兵士とおなじように、何者かがひっそりと彼の後を追跡していることに気づいていた。しかし、その原始的な眼覚ましのおかげで、彼は誰からも煩わされることなく、二度の夜をやすらかに眠ってすごした。

彼はいまでも、その寝室のなかに横たわっていた。さすがに明日基地に帰れると想うと、眼が冴えなくなかなか寝つかれなかった。

奇妙な任務だった。三日間で、この原生林を端から端まで往復してくれればいい。部隊長は、彼にそう命令をくだした。

ただ、それだけだった。

「そのほかには、なにもない」部隊長は、意味ありげな笑みをうかべながらいった。「ただし、携帯する武器はナイフ一本きりだ。それ以外は、なにひとつもっていいはいかん。磁石も、食糧も、むろん銃も駄目だ。その格好のまま森にはいって、西端の沼までいき、またおなじ場所にもどってくる。まっすぐ西へ歩き、またまっすぐ逆行してくるわけだ。道に迷う心配もない。簡単なことだろう。おまえに与える指令は、それだけだ」

おかしい命令だった。

俺がほんとうに、あんたのいうとおりあの底なし沼まで行って帰ってきたかどうか、どうやって調べらるつもりなんだい——。彼はそう訊きかえしてやりたかったが、なんとか思いとどまった。

「沼までは、直線距離で約一〇〇マイル。ちょっときついかもしれんが、三日で往復できんことはいいい」

と、部隊長がつづけた。

彼はたんなる使い捨ての一兵卒にすぎない。金線いりの襟章をくつつけたお偉がたのいうことに、文句をたれる権利なんて、これっぽっちもありはしないのだ。

「わかったか」

部隊長が念を押した。

ああ、あんたがやれていえば、お袋の尻の毛だってひっこぬいてきてやるぜ——。彼は胸のなかだけで悪態をつきながら、

「はい」

と、勢いよく敬礼をかえした。

それから彼はすぐにジープに乘せられ、原生林まで運ばれた。

「なにがあるんだい、あんなところで」

道すがら、ステイアリングを握った顔見知りの兵士が訊いた。

「しるもんか」彼はいまいましてげに答えた。「ターザンでも捜してくるんだろ」

「二時間ばかり前に、ひとり運んだぜ」

と、ドライヴァーがいった。

「これから、もうひとり連れてくることになってる」

いったい、なんのつもりだ——。彼はドライヴァーには聞こえぬように、そつとつぶやいた。

なんかのゲームなのか、これは。きつと、そうにちがいない。こいつは、お偉がたの暇潰しなのだ。やつらは酒でもくらいいながら、三人の兵士のうちで、誰がいつとう先に帰ってくるか、賭けていやがるんだ。

二時間ずつのずれは、ハンディキャップということなのだろう。彼は、自分がくだらぬ遊戯の道具に利用されていることではなく、彼よりももっと重いハンディを背負わされた兵士がいることにむかつ腹

をたてた。

「じゃあ、四日後に迎えにくる」

ドライヴァーは彼をおろすと、素晴らしいおいて、ジープをターンさせた。

「やってやろうじゃねえか」

彼は自らを奮いたたせるようにいった。

誰よりもはやく沼から帰ってきて、俺がいちばんだつてことを、おまえたちに教えてやる。

彼は原生林に走りこんだ。

彼は一日十八時間、ひたすらに歩きつづけ、沼に到達した。誰よりもはやくそこに着いたという確信が、彼にはあった。

「どうだ、糞馬鹿野郎」彼は沼にむかつて吼^ほえた。

「誰も俺にはかなわねえんだ」

帰路は、さすがにすこしペース・ダウンした。

それでも彼は、自分がかなりの差をつけて、悠々とレースの先頭にたつてゐることを疑つてはいなか

った。

考えてみれば、ほんとうにご苦勞様なこつた——。兵士は仰向けに寝転がったまま、闇のなかで彼をじつと見張りつづけてゐる瞳に、声にはださず話しかけた。

俺はあんたがそこにいることを知っているんだ。俺がずるをしないか、そうやって監視しているんだろう。あんたも、たいへんな役目をおおせつかったものだな。どうだい、俺は誰にも敗けなかつたろう。俺は、いちばんなんだ。そいつを明日、あの能なしどもにきちんと証明してくれよ——。

彼は誇らしげに顔をほころばせ、寝がえりをうつた。

だしぬけに、頭上から黒い塊が落下してきた。

撥^はね起きるいとまもなかった。

首根を膝で抑えつけられて、彼は苦しげに呻^{うな}いた。ひんやりした金属の感触をこめかみに覚えた。



「敵がいつも歩いてくるとはかぎらない」

彼の頭にコルト・ガヴァメントの銃口をこじりつけて、くぐもった声で男がいった。

「救けて……」

彼は喘ぐようにいった。

男がゆっくりとコルトのハンマーを起こした。乾いた音が、彼の耳に響きわたった。

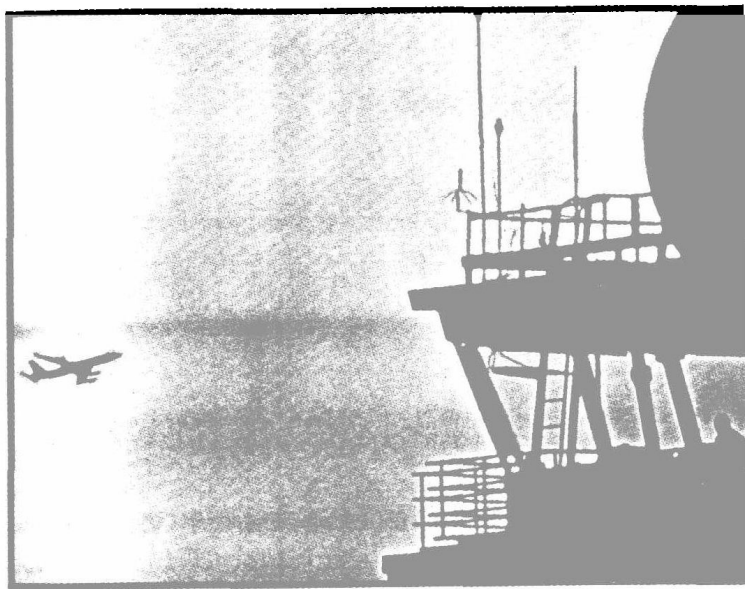
「あ……、あ……」

「失格だな」

男が死刑宣告をくだす裁判官のような口調でいった。

三人目の兵士が携えていた武器はナイフだけではなかった。ほかのふたりとは異なって、彼は知恵をもっていた。

それはこうした密林のなかで身を護るためには、なによりも有効な武器だった。



ほかのふたりのように、ただやみくもに沼をめざして突進することが、けっしていい結果をもたらさないことを、彼は充分に承知していた。

彼は涼しい夜間を、行動の時間に充てていた。

真夏の太陽が容赦なく照りつける昼間は、木のうえに昇り、頑丈な枝をベッドがわりにして眠った。そうやって彼は、徒^{いさろ}な体力の消耗を避けた。

むろん獣を狩るすべは知っていたが、彼はもっぱら木の実を採って飢えを癒した。そのほうが、獣肉よりも持久力をつけてくれるからだ。

彼はあらかじめコースの全長から割りだして、一時間に六マイルのペースを定め、それを崩さずに歩きつづけた。もっと進むことは容易だったが、彼は己れを厳しく律し、絶対に無理をしなかった。

たしかに彼は、沼に辿^{たど}り着く順番において、ふたり目の兵士の後塵を拝することになった。しかし、それはもとより計算ずくだった。

レースがそれで終わってしまうわけではない——。彼はすこしも焦ってはいなかった。

途中でいくら水をあけられようと、最後に、たとえ胸ひとつの差であれ、ゴールのテープを先に切ればいいのだ。彼には、その自信があった。

事実、彼は三日目の早朝、いぎたなく眠りこけている先頭ランナーを追い越した。

そこで彼ははじめてピッチをあげた。

昼間にゆったりと睡眠をとるためには、ここできるかぎり差を拡げておくことが必要だった。

彼はこの不思議な任務が、ある種の試験であることに気づいていた。彼の能力が、試されているのだ。そうだとすれば、プライドにかけて、おめおめと敗けるわけにはいかなかった。

その深更、彼は近づいてきたゴールにむけて、歩くペースをさらに増した。うまくすれば、夜明けすぎには、原生林をぬけだせるかもしれない。彼は、

勝利を確信していた。

彼はほほえんだ。

しかし、その微笑はすぐにこわばっていった。

また、彼のときすぎまされた神経が、警戒警報を発したのだ。

誰かが、彼のそばにいる。

樹海にはいつてから、その気配を感じとったのは、五回目だった。それはときおりあらわれて、なにをするでもなくしばらくのあいだ彼の行動を見守り、そして、あらわれたときとおなじように、ふっと原生林の彼方へ消え去っていった。

彼は全身の神経を張りつめさせた。

ブーツが固いものを踏んだ。ぶつり、と糸の切れるような音が、かすかに彼の耳を刺した。

闇のなかからいきなりなにかが、顔めがけて飛んできた。

彼はからだを投げだした。

それは唸りをあげて宙を縫い、太い木の幹に突き
たつてぶるぶると震えた。枝を削ってつくった槍だ
った。

彼は肱をついて上体を起こした。

そのとき傍らの地面が、うねるように蠢いた。

彼は腰のナイフに手を伸ばした。が、遅かった。

積もった病葉の下からあらわれた男が、彼にのし
かかった。両肩を男の膝で組みしだかれ、彼は動き
を封じられた。

男はちっぽけなスローイング・ナイフの鋒を、

彼の喉もとにくいこませて、

「惜しかったな。もうすこしだったのに」

と、からかうようにいった。

それから男は彼に笑いかけ、

「失格だな」

と、静かにつけくわえた。

＊

「情けないことだ」

部隊長はそう吐き棄てて、眼の前にならんだ三人
の兵士を眺めまわした。兵士たちは皆、ぼろ雑巾の
ごとくにくたびれ果てて、たっているのがやっとな
いうありさまだった。

「誰ひとりとして、無事に帰還できた者がおらんと
は……。まったく嘆かわしいことだ」

三人の兵士は彼の険しい視線に射竦められたよう
に、いっせいにうなだれた。

「おまえたちは、それぞれの分隊長から推薦された
えりすぐりの戦士だったはずだ。それがどうだ、こ
のていたらくは」

部隊長は顔を紅潮させて、声を荒らげた。喋るた
びに怒りがつのっていくようだった。

「ほんとうに、わたしは情けないよ。前線にたつき